

令和元年度
筑波大学博士学位論文
(概要版)

中国における中学生の登校理由の検討
——ポジティブ心理学の視点から——

筑波大学大学院人間総合科学研究科
ヒューマン・ケア科学専攻
201530382

王 巖崧

論文概要

【問題と目的】

日本の教育現場では、不登校は依然として解決が困難な課題である（文部科学省，2018）。

一方、中国では、親からの過剰な期待および受験競争によってより一層増えるストレスを感じながらも、子どもたちは休まず学校に登校している（ベネッセ教育開発センター，2008b；翟，2006；楠山，2010）。そこで、中国の中学生の登校理由を検討する必要があると考えられる。さらに、不登校に至ってから行う支援より、不登校に至らないための支援の有効性が指摘されている（五十嵐，2015）。以上のように、不登校問題において重要とされている予防的支援であるが、中国では、その予防的支援や登校理由と児童生徒のメンタルヘルスとの関連を実証的に扱った論文は限られている。そこで本研究の目的は、ポジティブ心理学の視点から、中国の中学生の登校理由を検討することによって、最終的には生徒のメンタルヘルスの維持や学校適応への効果的な援助、さらに予防教育についての示唆を得ることであった。

具体的には、次の4つの研究を行った。【研究1】登校理由の構成概念の検討，【研究2】重要な他者への感謝尺度の構成概念の検討，【研究3】登校回避感情を抱く中学生の登校理由の規定要因の検討，【研究4】登校回避感情を抱く中学生の登校理由とメンタルヘルスとの関連についての検討。

【対象と方法】

(1) 尺度作成するための予備調査（自由記述的質問紙調査）：中国の都市部中学校A校に通う中学生1・2・3年生計105名（男性49名，女性56名）および地方

の公立中学校 B 校に通う中学生 1・2・3 年生計 125 名（男性 57 名，女性 64 名，不明 4 名），計 230 名を調査対象とした。

（2）質問紙調査：中国の地方一東北地方（旧工業基地）吉林省の公立中学校に通う中学 1 年生～3 年生 235 名（ $M_{age} = 13.8$ ； $SD = 1.01$ ；46%男子 [$n=108$]，49%女子 [$n=114$]，5%不明 [$n=13$])，と都市部一長江三角洲地方（現在経済急成長している地方）の上海市，江蘇省と浙江省の 3 つの中学校に通う中学 1 年生～3 年生 853 名（ $M_{age} = 13.9$ ； $SD = 1.12$ ；51%男子 [$n=440$]，46%女子 [$n=389$]，3%不明 [$n=25$]) 計 1,088 名であった。また，吉林省の 2 年生 52 名（ $M_{age} = 14.4$ ； $SD = 1.10$ ；44%男子， $n=23$ ；54% 女子， $n=28$ ；2% 不明， $n=1$) を対象に，2017 年 9 月下旬と 2017 年 11 月上旬において，再検査を実施した。

【結果と考察】

第 1 章では，不登校に関する先行研究，第 2 章では，登校理由に関する先行研究，第 3 章では，中国における学校現場の現状と社会文化的状況，第 4 章では，感謝に焦点あててポジティブ感情の理論について展望を行った。具体的に，以下に示すような問題点があった。

1. 再登校することの困難さが明らかにされているが，不登校に陥った後の支援に関する研究が多く，予防的な視点からの研究は少ない。

2. 予防的な観点から，登校理由の重要性が指摘されているが，中国において登校理由を実証的に扱った論文はほとんどない。

3. 日本において，登校理由の実証的研究も散見されるが，登校理由の構成概念は研究者により少しずつ異なる。さらに，翟（2006）は，本間（2000）が作成した「登校理由尺度」を使用し，中国都市部の中学生を対象に調査を行ったが，中国の児童生徒を対象に予備調査を行っておらず，登校理由尺度の信頼性と妥当性も検討していなかった。

4. 現在の中国では、大きなストレスを感じながら登校している児童生徒が多く（王，2014；王・庄司，2015a），決してメンタルヘルスがよいとは言えない。彼らの内面的な側面，特に登校理由，友達関係，学校ストレスや疲労感などを検討する必要がある。

5. 中国では，学校生活において，特に，重要な他者への感謝の重要性が指摘されているが，実証的に扱った論文は限られている。また，感謝についての研究の中で，いくつかの観点から研究されているが，その定義や構成概念も研究により少しずつ異なっている。感謝に関して今後より実証的な研究を行なっていく必要がある。

6. 感謝とメンタルヘルスに関する研究は，欧米で多く検討されてきたが，アジアにおけるこのような研究はまだ多くはない。さらに，感謝は文化的枠組みと深く関連を持っている（Cohen，2006）ことから，中国の生徒の感謝とメンタルヘルスとの関連について検討する余地があると考ええる。

以上の検討を踏まえ，ポジティブ心理学の視点から，中国の中学生の登校理由を検討することによって，最終的には生徒のメンタルヘルスの維持や学校適応への効果的な援助，さらに予防教育についての示唆を得ることを目的とする。

具体的には，中国の中学生を対象に，登校理由について，以下の4点を検討することを目的とする。

（1）先行研究の知見をもとに，中国の中学生の登校理由がどのような概念か実証的に検討する。具体的には，登校理由尺度を作成することによって，登校理由の構成概念を明らかにする。

（2）先行研究の知見をもとに，中国の中学生の重要な他者への感謝がどのような概念か実証的に検討する。具体的には，重要な他者への感謝尺度を作成する。

（3）中国の登校回避感情を抱く中学生の登校理由の規定要因について明らかにする。

（４）中国の登校回避感情を抱く中学生の登校理由とメンタルヘルスとの関連について明らかにする。

以上の問題点を踏まえた上で、本研究の第二部では、中国版中学生用登校理由尺度の作成（研究 1）、中学生用重要な他者への感謝尺度の作成（研究 2）、登校回避感情を抱く中学生の登校理由の規定要因（研究 3）、登校回避感情を抱く中学生の登校理由とメンタルヘルスに関する検討（研究 4）、の 4 つの研究を検討した。その結果は以下の通りである。

研究 1：中国版中学生用登校理由尺度の作成

中国版中学生用登校理由尺度の構造を明らかにするため、中学生用登校理由尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。第 1 節（研究 1-1）では、予備調査から中国版中学生用登校理由尺度を作成するための項目収集をした。第 2 節（研究 1-2）では、中国の 4 校の中学生 1,088 名（有効回答者 952 名、有効回答率 88%）を対象に、質問紙調査を行った。また、探索的因子分析を実施した。その結果、「外的圧力」「規範・義務」「学校魅力」「習慣」の 4 因子が得られ、その信頼性と妥当性が確認された。

研究 2：中学生用重要な他者への感謝尺度の作成

中学生用重要な他者への感謝尺度（以下感謝尺度）を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。第 1 節（研究 2-1）では、予備調査から感謝尺度を作成するための項目収集をした。第 2 節（研究 2-2）では、中国の 4 つの中学校の中学生 1,088 名（有効回答者 952 名、有効回答率 88%）を対象に、質問紙調査を行った。また、探索的因子分析を実施した。その結果、「学業を通した返報動機」と「感謝感情」の 2 因子が得られ、その信頼性と妥当性が確認された。

研究 3：登校回避感情を抱く中学生の登校理由の規定要因

登校回避感情を抱く中学生の登校理由の規定要因を検討するため、重要な他者への感謝、教師への信頼感との関連を検討した。中国の 2 つ中学校の中学生 560 名を対象に質問紙調査を行った。

第 1 節（研究 3-1）では、登校回避感情あり群と登校回避感情なし群の多母集団同時分析を行い、「感謝尺度」が「登校理由尺度」に与える影響を検討した。その結果、登校回避感情あり群となし群は登校理由に影響する要因の違いが認められた。また、重要な他者への感謝が中国の中学生の登校理由に影響を及ぼすことが明らかになった。さらに、登校回避感情を持っている児童生徒の「学業を通じた返報動機」は「規範・義務」、「習慣」に、「感謝感情」は「学校魅力」を促進した可能性が推察された。

第 2 節（研究 3-2）では、登校回避感情あり群と登校回避感情なし群の多母集団同時分析を行い、「教師への信頼感尺度」が「登校理由尺度」に与える影響を検討した。その結果、登校回避感情あり群となし群は登校理由に影響する要因の違いが認められなかった。また、教師への信頼感が中国の中学生の登校理由に影響を及ぼすことが明らかになった。さらに、教師への信頼感の中の「安心感」は児童生徒の「学校魅力」といった登校理由を促進することが明らかにされた。

研究 4：登校回避感情を抱く中学生の登校理由とメンタルヘルスに関する検討

研究 4 では、登校回避感情を抱く中学生の登校理由とメンタルヘルスに関する検討のため、登校理由と学校適応感、疲労感との関連を検討した。中国の 2 つの中学校の中学生 560 名を対象に質問紙調査を行った。

第 1 節（研究 4-1）では、登校回避感情あり群と登校回避感情なし群の多母集団同時分析を行い、「登校理由尺度」が「学校適応感尺度」に与える影響を検討した。その結果、登校回避感情あり群となし群は登校理由に影響する要因の違いが

認められなかった。また、登校回避感情の有無を問わず、親や先生からの「外的圧力」は学校適応感にネガティブな影響を与えていることが明らかにされた。さらに、「学校魅力」は学校への適応感、特に被信頼・受容感と学校生活充実感に強い影響を与えており、学校魅力の重要性が示唆された。

第 2 節(研究 4-2)では、登校回避感情あり群と登校回避感情なし群の多母集団同時分析を行い、「登校理由尺度」が「疲労感尺度」に与える影響を検討した。その結果、登校回避感情あり群となし群は登校理由に影響する要因の違いが認められなかった。また、登校回避感情の有無を問わず、親や先生からの「外的圧力」と「習慣」は疲労感に正の影響を与えていることが明らかにされた。さらに、「学校魅力」が高いと、疲労感、特に意欲・体力低下、気力低下、イライラと負の影響があり、疲労感が低くなることが明らかになった。

【結論】

以上、第 1 章から第 9 章について本研究の結果を概観した。その結果、まず、研究 1 では登校理由の構成概念が明らかになり、研究 2 において、重要な他者への感謝の構成概念が明らかになった。また、研究 3 では、「感謝」と「教師への信頼感」が登校理由に影響を与えることが明らかになった。このことから、重要な他者への感謝、特に学業を通じた返報動機が中国の中学生の登校理由に大きな影響を与えていることが示唆された。研究 4 では、登校理由が生徒のメンタルヘルスにどのように影響を与えているかが明らかにされた。このことから、中学生のメンタルヘルスを維持するため、学校魅力が重要であることが示唆された。

本研究の結果を総合的に踏まえると、中国では、ポジティブ感情の一つとして感謝は、中国の中学生は休まずに、登校し続けていることの 1 つの重要な要因になっていると考えられる。感謝はポジティブな登校理由を高める重要な働きとして、今後の教育現場で重要な他者への感謝を育てることが、最終的には生徒のメ

ンタルヘルスの維持，さらに教育実践の質の向上に影響すると考えられた。

本研究の限界と今後の課題として，（１）より多くの中国の地域データを収集する必要性，（２）中国版登校理由尺度と重要な他者への感謝尺度の弁別的妥当性を検討する必要性，（３）縦断的調査の必要性，（４）日常生活における中学生の登校理由の様相と変容を明らかにするために，今後，半構造化面接を行うことが必要性の４点を指摘した。